

『継子の栗拾い』考

—AT480の視座から—

桜井由美子

【イントロダクション】

昔話の国際比較を進めるうえで、特に話型研究を目指す場合、該当する話をどう捉えるかという問題は、非常に重要な問題である。しかし、トンブソン以来の、話型を《单一ないし、ある一定の順序で語られる複数のモチーフからなる、独立に伝承可能な説話》であるとする定義はかなり漠然としたものであり、個々の話型は経験的かつ直感的に決定されてきた。この話型をもう少し客観的に規定できなくなるだろうか。構造分析の手法を持ち込むことにより、一つの話型を支配する文法とも言うべき統辞構造（話の要素がどういう順序で並ぶかを記述する連辞列⁽¹⁾と、その連辞列にはどんな要素が選択枝として現れ得るかを記述する選辞列⁽²⁾とを含む）のレベルと、その話型にまとまりを付与し、独立性を保証する意味構造のレベルとを析出する」とでこの問題に一つの作業仮説を提出してみようというのが以下の試みである。AT480はそのためには適當な話型であると思われた。

AT480を世界的な規模で研究したW.E.ロバーツは、この話型を2つの大きなサブタイプに分類した。そのひとつは

- (1) 『川の流れを追って』サブタイプ (the Following the river subtype)
- (2) 『道での出会い』サブタイプ (the Encounters en route subtype) である。

(1)と(2)の違い (2)では、主たる贈与者の許に向かう途中、主人公は別の贈与者の性格を持つ登場人物と出会い⁽²⁾。この出会いと試練は「価値」の獲得に結びつかないが、主たる試練と全く同じ性格の試練である。従って、一つの行程の《試練》の部分に膨らみを持つ話群と捉えることができる。(1)と(2)には、統辞構造上も、意味構造上も本質的な違いはない。

ところで、この分類の中で日本の類話は次のように位置づけられる。

『継子の栗拾い』は『川の流れを追って』サブタイプにはいる⁽²⁾。

『古切り雀』は《道での出会い》サブタイプに属す。⁽³⁾

『地蔵淨土』及び『鼠淨土』は、AT480 には属さない。⁽⁴⁾

これらの判断は、モチーフの一致を基にしてなされる。『地蔵淨土』及び『鼠淨土』については、導入のモチーフ（転がるケーキの追跡）が一致するだけなので、AT480 には属さないとする。詳しい議論をする余裕はないが、私見では『古切り雀』は AT480 には属さない。というのは、主人公は爺婆であり一人の娘ではないので、試練の意味付けが変わってくると思われるからである。

2 日本の研究者が見た AT480 と日本の昔話との対応関係

では次に、日本の研究者が AT480 と日本の昔話との関係をどう捉えてきたかを見てみよう。日本の昔話の総合的話型カタログである『日本昔話大成』『日本昔話通観』及び、アールネットンソンの『昔話の型』と日本の話型との対応関係を考察した『世界の民話』(解説編、第3章、第4章)を基に、対応関係の捉え方を探してみよう。

閻 敬吾『日本昔話大成』

地蔵淨土、ネズミ淨土、舌切り雀、継子の栗拾い、継子の莓拾い、継子と井戸、六月息子、米福粟福 (480 +510A)

稻田浩一『日本昔話通観』

継子の井戸堀、猫屋敷、継子のいちじ取り (一部のモ

チーフが一致)

『継子の木の実拾い』は AT368*, AT403, AT510 を対応させる)

小沢俊夫『世界の民話』—解説編—

地蔵淨土、ネズミ淨土、古切り雀 (構造上の一致のみ)

稻田氏は AT480 と『継子の栗拾い』との対応関係を全く認めない。小沢氏は、AT480 と先に挙げた3話型との間に構造上の一致のみを認め、アールネットンソンの『昔話の型』を日本の昔話と対応させる際の“きわめてゆるい対応を示”す例として使い、「継子の栗拾い」とは対応させない。但し、巻末の「日本の話型名またはモティーフ名による索引」には、(ホレ婆ちゃん型) という限定付きで、『まま子の木の実拾い』の項に、対応する AT480 の類話を挙げてある。⁽⁵⁾

閻敬吾は『大成』の『継子の栗拾い』の注の中で、AT480 の主題は「主人公の親切もしくは対人態度の相違によって相反する明白な結果をもたらすこと」であり、話の構造は「まず親切な主人公が異郷に迎えられていき、幸運を授けられ、不親切な者がこれを模倣して失敗する」というものであると捉える。⁽⁶⁾ このような広い解釈の結果、『継子の栗拾い』だけでなく、『隣の爺型』の話型群や『見るな屋敷』などにも AT480 との対応関係を認める。結局、日本の研究者で『継子の栗拾い』と AT480 との対応をはつきり認めるの

は関敬吾だけである。

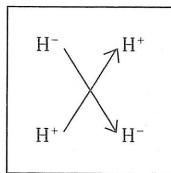
ここで2つの問題が明らかになる。今までの議論から、外国の研究者は『継子の要拾い』はAT480に属すると捉え、日本の研究者は『継子の要拾い』をAT480とは結びつけない傾向があるということが判る。従って、『継子の要拾い』とAT480の対応関係が成立するか否かが先ず問題になる。この問題を統辞構造と意味構造の両方のレベルから検討する。対応関係は成立するというのが筆者の結論であり、対応関係を導き出すのが、本論の第一の目的である。

第一の問題は、対応関係が成立するとすれば、では今まで何故、『継子の要拾い』とAT480とが関係付けられてこなかったかといふことである。この問題は(1)『地藏淨土』の影響、(2)『米福粟福』との関係の2つの面から考えることにする。

3 AT480 の統辞構造

ソ連のトップの後継者である説話研究者エリヤツアール・メレンスキイによれば、昔話の統辞構造は「試練と獲得した価値の二つの機能を一対とするような二項一組のまとまりの連續に還元される⁽⁷⁾」。そこで、一つの行程を「試練—価値の獲得」を軸とする、ある状態から別の状態への変換過程と捉えたうえで、AT480の統辞構造を記述すると次のようになる。

第一の行程



I 発端 「価値」の欠如の状態 (《負》の主人公)

II 變換過程 (試練—価値)

1 《正》の主人公が「贈与者」と会い、「試練」を課される。

2 「正しい」反応

3 「正の価値」を獲得する。

III 結末 「価値」を得た状態

第二の行程

I 発端 「価値」の欠如の状態 (《負》の主人公)

II 變換過程 (試練—価値)

1 《負》の主人公が「贈与者」と会い、「試練」を課される。

2 「間違った」反応

3 「負の価値」を獲得する。

III 結末 「負の価値」を得た状態

『隣の爺型』の話型との一致はないのレベルの事である。登場人物やその行為をある程度まで具象化したレベルでの一致を前提とする話型のレベルでは、AT480は次のように記述である。

第一の行程

I 発端 「価値」の欠如の状態（『正』の主人公）

一人の娘（姉妹または実子と継子）との（継）母が暮らしている。母親が一人を可愛がり、もう一人を虐める。虐められる娘が『正』の主人公である。

II 変換過程（試練—価値の獲得）

1 「負」の「価値」を獲得する。

主人公がなんらかの理由で家を出て、主に女性の贈与者に大人としての成熟度を試す試練を課される。

2 「正しい」反応

試練者の求める規範にあつた成熟を示す反応をする。

3 「正の価値」を獲得する。

富や美を獲得する。

III 結末 「価値」を得た状態

富や美を持って家に帰る。

第二の行程

I 発端 「価値」の欠如の状態（『負』の主人公）

もう一人の娘または母親がそれを羨む。

II 変換過程（試練—価値の獲得）

1 『負』の主人公が「贈与者」とない、「試練」を課される。家を出で、同じ贈与者に出会い、同じ試練を課される。

2 「間違った」反応

試練者の求める規範に反する未成熟を示す反応をする。

3 「負」の「価値」を獲得する。

無価値な物や醜さまたは死を与えられる。

III 結末 「負」の「価値」を得た状態

それらを持って家に帰る、または死により帰宅できない。

IV 「継子の栗拾い」の検証

『継子の栗拾い』（もじの記述の中に収まるかどうかを検証する。先ず『継子の栗拾い』の例話を一話紹介する。

（第1の行程）
—No.37)

継子の椎拾い（『日本昔話通観』第二十三巻—福岡・佐賀・大分
昔々ほんの子と継子とあつたそつうな。

II 変換過程及び III 結末

或日お母さんが、「今日は一人じ椎拾いに行ち来い。一ぱいにならにや帰るにたアならんぞ」ちうてほんの子には底のある袋を、繼

子には底のない袋をやっつち椎拾いにやつたそな。ほん子はすぐ一ぱいになつたけんど継子の方は底がねエ肯ん一ぱいにならんそな。夕方になつたけんほんの子が「姉さんもう帰ろうじゃないな」ちうけんど継子は「一ぱいにならんけん帰られん」ちうのじ「そんなら先に帰るで」ちうてほんの子は帰つたそな。

そうしよるうちに夜になつたけん継子は地蔵様の所に行ち「地蔵さん地蔵さん夜になつたけんと帰られんけん匿もうち下さいまし」ちうたりヤ地蔵様は「よしよし匿もうちゅるけん袖の下にはいれ。けんど鬼が来ゆけん黙つちヨラにやいけんぞ。いい時には相図をするけん、俺の袖をバタバタちいわせてヨケヨトロもいえ」といわれたそな。夜が更けち鬼が「地蔵様ア人臭せ人臭せ」ちうて出て来たそな。そのうちに地蔵様が相図をしたけん地蔵様の袖をバタバタちいわせてヨケヨトロもいりや。鬼はほんとに夜が明けたんかともうて宝物を抜け散らしもいて、逃げたそな。それで継子はそれを拾つち帰つたそな。

(第2の行程)

I 発端 II 変換過程 及び III 結末

継子がそれを聞くと今度はほんの子に底なしの袋を、継子に底のある袋を持たしち拾いにやつたそな。今度は継子の方が一ぱいになつたけん「もう帰ろうじゃないな」ちうけんど、ほんの子は「一ぱいにならんけん帰られん」ちうて残つたそな。夜になつたけん、又地蔵様に頼んで匿もうち貰うたそな。地蔵

様は鬼が出るけん、相図した時に袖をバタバタちいわせてコケコロちいえ」といわれたそな。夜が更けち鬼が又「地蔵様ア人臭せ人臭せ」ちうて出たそな。地蔵様が相図をしたけん袖をバタバタちいわせてヨケヨトロもいだけんと司業しうつちハヘハヘハヘ笑うなりや。鬼が「ほら地蔵様ア人臭せもうちヨル」ちうて引張り出しも引きさいち食うたそな。

(網掛けした部分は『地蔵淨土』と共に通する箇所)この話を先ほど示した AT480 の統辞構造に即して分析を施し表にまとめるとき次頁以下の表(第一の行程、第二の行程)のように記述できる。参考のため、フランス(ガスコニー地方)とアフリカ(西アフリカのドゴン族)の類話にも一話ずつ同様の分析を施した。この様に大分の類話はAT480 の統辞構造に沿つて記述でき、『継子の栗拾い』は統辞構造のレベルでは AT480 に属することが判かる。

5 『継子の栗拾い』の意味構造

では次に、意味構造のレベルを検討してみよう。この問題については、フランスのアフリカ研究者、ジュヌヴィエーヴ・カラム・グリオールのアフリカの『一人の娘』(AT480)の話についての論文、『壊れた瓢箪⁽⁸⁾』と、『米福粟福⁽⁹⁾』についての斎藤寿始子氏の論文が、たいへん示唆に富るものであった。

カラム・グリオールは、『二人の娘』の話を少女の「子どもから大人への成長と社会集団への統合の問題』を扱つた話であると見なす。

(第一の行程)

1. 発端

AT480	大分	ガスコーニュ	ドゴン
主人公：二人の娘	二人の娘	二人の娘	二人の娘
母親との関係：実子二人／実子と繼子	実子と繼子	実子と夫の子	実子と繼子
正の主人公：	繼子	夫の子	繼子

2. 変換過程（試練－価値の獲得）

出発の理由：繼母の命令	椎拾い（二人）	ゴミ捨て	皿を洗いに
付帯状況：	実：底有り袋 継：底無し	篩に入れて 川へ	生の粉で皿を 汚した
贈与者：女性	地蔵 〔鬼〕	（洗濯女たち） 聖母マリア	（羊飼いたち） （山羊飼いたち） （白髪の老婆） ノモ（バヌ沼の主）
試練の場：他界	地蔵の所	（川岸） 聖母の家	（途中） （　　） （バヌ沼の辺） バヌ沼の底
試練の内容：成熟度テスト	鶏まね	虱取り 選択（食物、 服、馬）	（挨拶のやり取り） （　　） （　　） ノモの卵の番
反応：規範に合う 反応	上手に真似る	金、銀がある 芋、破れ服、 瘦せ馬	（挨拶する） （　　） （　　） 番をする 〔卵が孵る〕
獲得する 価値：富／美	鬼の宝物	金と銀付いていく 鶏もも、美服、 駿馬 額に金の星	（ノモ沼への道） （　　） （ノモ沼の指示） 穀物小屋（無数の 家畜や皿など）

3. 結末

帰還：富／美を伴い 帰宅	鬼の宝物を持 ち帰宅	美服、駿馬、額に 金の星伴い帰宅	無数の家畜や皿など が付いてくる
-----------------	---------------	---------------------	---------------------

(第二の行程)

1. 発端

負の 主人公：もう一人の娘	実子	実子	実子
------------------	----	----	----

2. 変換過程（試練－負の価値の獲得）

出発の理由：羨んで	羨んで	羨んで	羨んで
出発の状況：	椎拾い（二人） 継：底り袋 実：底なし袋	ゴミ捨て 篩に入れて 川へ	皿を洗いに 生の粉で皿を 汚した
贈与者：女性	地蔵 (鬼)	(洗濯女たち) 聖母マリア	(羊飼いたち) (山羊飼いたち) (白髪の老婆) ノモ（バヌ沼の主）
試練の場：他界	地蔵の所	(川岸) 聖母の家	(途中) (“ ”) (バヌ沼の辺) バヌ沼の底
試練の内容：成熟度テスト	鶴まね	虱取り 選択（食物、 服、馬）	挨拶のやり取り (“ ”) (“ ”) ノモの卵の番
反応：規範に反する反応	笑う	虱と虱の卵あり 鶴もも、美服 駿馬	(挨拶せず) (“ ”) (“ ”) 遊びで卵を割る
獲得する 負の価値：	鬼に喰われる	虱と卵付いていく 芋、破れ服、 瘦せ馬 頭に驢馬の耳	穀物小屋（瘦せ馬 糞の皿、諸々の 汚物）

3. 結末

帰還：負の価値を伴い 帰宅／死	死	破れ服、瘦せ馬 頭に驢馬の耳を 伴い帰宅	瘦せ馬、糞の皿 諸々の汚物が付いてくる
--------------------	---	----------------------------	------------------------

《ノモ》：ドゴン族の神話と宗教に於て重要な超自然的存在であり、水と言葉と豊饒とを司る。この話の中では牛の鷲（クロコダイル）の姿をしていると思われる(cf. G.C-G., p. 33).

少女の成長は、大人の女の地位に就きたいと思う若い世代と彼女たちに脅威を感じる年上の世代とを生殖能力「フェコンディテ」を賭けたライバル同士という葛藤の状態に置く。娘の成人は母親の世代に地位の明け渡しを迫るからだ。この葛藤に解決をもたらすのが娘のイニシエーションの旅であり、『一人の娘』はその過程を物語るというのがカラムーグリオールの主張である。

アフリカのイニシエーション儀礼は、

- 1 家族との分離と藪や森への隔離
- 2 試練（身体的、倫理的、知的）
- 3 教育
- 4 象徴的な死と再生
- 5 帰還と集団への再統合

という構造図式に還元し得るが、¹⁰昔話の中では、2、3、4の段階は、象徴的死と再生（擬死再生）のための試練の段階として一まとめにする事ができよう。この図式は、齊藤氏が繼子譯、特に『米福粟福』を「少女成長にかかる通過儀礼としての『生まれ清まり』」を主題とし、「他界を訪問し、試練を克服して、生まれ清まり幸せに生きる」という構造をもつ話であると読み解くとき、対象とする話型は異なるが、カラムーグリオールの主張との同一性を認めることができる。「生まれ変わるためには困難を通して罪穢を清めなければならない」という「生まれ清まり」の概念は、アフリカの類話の中に現れる「冒頭で犯した過ちを擬死再生を伴うイニシエーションの旅によって償う」という考え方（ドゴン族の話では、

娘が火を通したものしか入れてはいけない父親の皿にバオバブの生の粉を入れるという過ちを犯す。皿のけがれを洗い清めるために、娘は死と同義語であるバヌ沼へ行って来なければならない）と一致するといって差し支えなかろう。ところで、筆者は、後で述べる理由により、齊藤氏の『米福粟福』に関する主張は『継子の栗拾い』にこそ当てはまるものだと考える。

『継子の栗拾い』の例話に即していえば、

〔第一の行程〕

発端＝生殖能力「フェコンディテ」の獲得と譲渡を巡る異世代間の
葛藤＝継母と継子の葛藤

変換過程

- 1 家族との分離と藪や森への隔離＝椎拾い
- 2 象徴的な死と再生の過程としての試練＝地蔵の袖の下に隠れて、人喰い鬼を鶏の鳴き真似で追い払う
- 3 帰還と集団への再統合＝成女になつたことの証としての宝物（豊饒「フェコンディテ」）の象徴を持つて家に帰る。

結末 繼母が、継子の持ち帰った宝物を羨むことで、継子が成女になつたことを認める

〔第二の行程〕

発端 母子分離のできない母親と娘／（実子と継子の間の同世代間の対立）

変換過程

- 1 家族との分離と藪や森への隔離＝椎拾い

象徴的な死と再生の過程としての試練＝地蔵の袖の下に隠れて、

人喰い鬼を鶏の鳴き真似で追い払おうとするが、笑ってしまい
できない。

3 イニシエーションに失敗＝鬼に喰われて死ぬ。

結果 (実子及び) 繼母の敗北

この様に、『継子の栗拾い』は少女成長のイニシエーション・ストーリーとして理解できる。

以上で、統辯構造及び意味構造の両方のレベルで、AT480 と『継子の栗拾い』との対応関係が検証できたと思われる。

そこで、今まで何故、『継子の栗拾い』と AT480 とが関係付けられてこなかつたかという第一の問題を(1)『地蔵浄土』の影響、(2)『米福栗福』との関係の2つの面から考えてみる。

6 『地蔵浄土』の影響

『地蔵浄土』は、閑敬吾氏が『大成』の注記で次の1から7のモチーフに分析した。⁽¹³⁾

- 1 爺が団子(豆、握り飯)を取り落とすと穴の中に転げていく。
- 2 あとを追っていくと地蔵がいてそれ(団子、豆、握り飯)を食っている。
- 3 地蔵はそのお札を約束する。
- 4 爺が地蔵の後ろ(天井)に隠れていると鬼が来て博打を打また

は金を分ける。

5 爺は地蔵に教えられ鶏の鳴きまねをする。

6 a 爺はその金または宝物を持ち帰る。(bは省略)
7 a 隣の爺がまねて失敗する b 殺される。

このうち、第一の行程の変換過程と結果に該当する2から6と、

第一の行程に該当する7の、『継子の栗拾い』への影響が大きい。

筆者の参照した54話の『地蔵浄土』の類話の内、主人公の爺が地下世界ではなく山で地蔵と出会うという話が少なからずある(山のお堂(12話)、山(1話)、山の家(2話))。『継子の栗拾い』の「贈与者」との出会いの場所は、「山の家」が23例、「山のお堂」が19例あり、この辺りから『地蔵浄土』との混同が始まるのがわかる。『地蔵浄土』では、鶏の鳴き真似を上手にやることが話型に固有の試練である。『継子の栗拾い』では「試練」は「鶏の鳴きまね」を課すタイプ(23話/51話)と「鶏の鳴きまねのない」タイプ(15話/51話)に分かれる。この場合は、「隠れる」「膝・肩・頭に上れと言われる」「箱の選択」などが試練の主な内容となる。この三つは、鶏まねの試練と組み合わされる場合もある。贈与者としては、地蔵が最も多く現れ(16話)、次に婆(11話)が多い。いずれもの場合も、「敵対者」としての「鬼」がペアで登場する。贈与者の位置には、お太子、八幡、爺、觀音、若い女、亡き母などが登場することもあり、鬼だけという話も四話ある。鶏まねタイプの中に、「鬼が博打をする」という例が六話ある。

価値の獲得の段階では、継子は鬼から無事に逃れるための忠告と、

銭や宝物を得る。「鶏まねあり」型では、銭や宝物をもって帰る場合が多く（14話）、「鶏まねなし」型では、箱や袋などの入れ物を貰う場合が多い（7話）。

第二の行程で実子は、鶏真似の試練には、「鶏の鳴きまねをするが笑う」という反応、それ以外には「隠れた場所で笑う」「言われもしないのに、膝肩頭に上る」「重い箱を選ぶ」などの反応を示す。そして、鶏まねタイプでは、「忠告を得られない」「鬼に喰われて死ぬ」という負の価値、鶏まねのないタイプでは、「貰った箱にがらくたや蛇虫などがはいつている」という負の価値を与えられる。

『地蔵浄土』と『継子の栗拾い』との混向は、一つは地蔵が日本の民間信仰では、地獄に落ちた人々を救ってくれる仏であると同時に、道祖神とも混同され、「境の神」として峠や村と村との境にもまつられており、人々に、地蔵はどちらの世界に現れても不思議はないと思われていたことも影響していようが、門外漢の筆者には推論の域を出ない。また話型としての力も地蔵浄土の方が圧倒的に強い。『大成』に記されているだけでも284話の類話擁し、日本全国に分布し、等質性も高い。対称性と結末における主人公二人の状態の幸／不幸への両極分解という『二項構造』の内包する論理を実際に見事に又明快に満足する。それに対し『継子の栗拾い』は、107話が記されているが、分布にも偏りが見られ（西日本が中心）、継子が試練を無事克服した成女であることを継母が認めざるを得ないとはいえ、葛藤の状態にある継母と継子が一つ屋根の下に残ることになり、継子の幸せに不安が残ることは否めない。これが、『継子の栗

拾い』が、「宝を持ち帰ること」が直接幸せと結びつく『地蔵浄土』と結びついた大きな理由の一つだと思われる。

7 『継子の栗拾い』と『米福栗福』の関係

最後に、『継子の栗拾い』と『米福栗福』との関係について一言述べておく。『米福栗福』について閑散吾は、「米福栗福の昔話・物語文学と関連して」という論文の中で、構成要素として

A 繼娘の虐待、栗拾い / B 庇護者 / C 母娘の祭見物 / D
援助者 / E 繼娘の祭見物 / F 求婚、花嫁試験 / G 結婚 /
H 反対者の懲罰

の八つを挙げる。さらにこれを結婚の前提段であるA、B（継娘の虐待、栗拾い／庇護者）とC、D（母娘の祭見物／援助者）、中心的内容をなすE、F（継娘の祭見物／求婚、花嫁試験）、結末をなすG、H（結婚／反対者の懲罰）の3段にまとめす。そして、A、BとC、Dは「昔話からみれば本質的には同一の意味の繰り返し」であると捉える。一方斎藤氏は、A、Bは山中訪問、C、Dは祭礼詣り、という他界訪問のモチーフであり、この全体が難題克服のための他界での試練を物語る展開部を構成すると考える。しかし、構造分析の立場からいえば、『米福栗福』は「予備試練」「中心試練」「追試練」の三対の「試練／価値の獲得」からなるメレチンスキーのいう「古典的魔法昔話」の構造を持つ。この三つの試練の間

には、「中心試練」は「予備試練」で主人公が獲得した「手段価値」

に支配され、「迎試練」は「中心試練」で主人公が獲得した「田的
価値」の支配を受けねじらう関係がある。閑散君の構造要素で云ふ
ば、A'、B は予備試練、C'、D'、E は中心試練、F'、G'、H は迎試
練である。山中での試練の結果継子が獲得するのば、延命小袋、う
ちでの小槌、美しい着物が入った箱といった「祭 (社) 國」に美しい
着物を着て現れ、求婚者の田に止める」いう中心試練の際に役立
つ品、つまり『手段価値 (祝具)』であり、「求婚、花嫁試験と結婚
及び反対者の懲罰」は眞の主人公を回定するための迎試練とそれに
付随する報償と懲罰に当たるからだ。『継子の栗拾い』は一つの行
程のうちの第一の行程を削り、試練の結果継子の獲得する価値を、
未分化な価値から手段価値に転じた上で、『米福栗福』に組み込まれ
れたといふも。

『米福栗福』は「思春期の女兒の婚姻に到達する過程を語るもの」
(閑散君) いう意味では、少女の成長を語る指詔には違いないが、
話の中心は婚姻の方にあり、イリシニア・モンの次の段階を物語っ
てこね。『継子の栗拾い』が『米福栗福』の冒頭に組み込まれた理
由ゆゑにあねし思われる。従って、純粹なイリシニア・モン・ス
トーリーは矢張り『継子の栗拾い』の方でおねじらのが筆者の
主張である。

- (一) W. E. Roberts, *The Tale of the Kind and the Unkind Girls — A TH 480 and Related Tales*, Berlin, W. de Gruyter, 1958 (*Fabula*, Supplement-series B: Untersuchungen Heft 1).
- (2) ibid, p. 109-110.
- (3) ibid, p. 134-135.
- (4) ibid, p. 158-159.
- (5) 『聖經の此詔』—般説釋—〈聖米〉^{セント}、p. 84.
- (6) 『日本昔話大成』第五卷、p. 226.
- (7) Claude Bremond, "Postérité soviétique de Propp", *Cahier de Littérature orale*, No. 2, p. 23.
- (8) Geneviève Calame-Griaule, "la calebasse brisée", *Cahier de Littérature orale*, No. 1, 1976.
- (9) 斎藤寿始十「継子の栗拾い」の脚本—少女成長の主題やねじ
て—、『大谷学報』第64期(1985)。
- (10) Calame-Griaule, op. cit., p. 23.
- (11) 斎藤、前脚本文、p. 60.
- (12) 回上、p. 65.
- (13) 『日本昔話大成』第四卷、p. 115-116.
- (14) 閑 敬君「米福栗福の指詔—物語文学の関連—」
『閑散君著作集』第4卷(日本昔話の比較研究)
- (15) 閑 敬君 回上、p. 114.